

新著聞集

卷



新著聞集

目錄

一卷第一

一卷第二

一卷第三

一卷第四

一卷第五

忠孝篇

慈愛篇

酬恩篇

報仇篇

崇行篇



一卷第六

勝蹟篇

一卷第七

勇烈篇

一卷第八

倭奸篇

一卷第九

崇厲篇

一卷第十

奇怪篇

一卷第十一

執心篇

一卷第十二

冤冤篇

一卷第十三

從生篇

一卷第十四

殃禍篇

一卷第十五

婦智篇

一卷第十六

清直篇

一卷第十七

俗談篇

一卷第十八

雜吏篇

總目錄止

新著聞集

忠孝篇第一

忠臣鉄火の中と焼す

兄弟のうて去り支丹了

擯駕門外

人て進慕して三番了

百姓甚助孝懐して家富

存母了ハ孝を尽して父ハ純て

勢別うめ山父兄の歌と

後聖遺臣が取義討

大坂のお年一に慕い自滅す

母をいさめ水了入る

極悟乃臣の待て賊を斬す

釈す了父母了見んるを祈す

忠臣決火の中を焼す

有智日向智殿乃頼晒られし何者やん

澄一の身議甚しやし内は存候候と

浪人きしうに人種しるる日何者乃老臣

妾は内務女が存おるうと訴へしうば頼て内務女

と云ふきれ初るふて内務女威候と

みの外れもききしう大筑おさるうハ

似合る候るう止君如意と遣せんしかく

御うとてし其の事られはいくもても晒す

法王のふかともうぶきふ某^{たか}ぬすむくして
何の益^{えき}もつくといひうば筑^{つく}おさるも
おれ^しのうに早^{はや}なるれあうとて内務^{うちむく}と
候^いはとて天^{てん}神^{しん}のおと秋^{あき}大^{だい}で握^{にぎ}てに候^いは
もち海^{うみ}も焼^やくまに内務^{うちむく}何^{なん}のや
めもつとるれとほく難^{がた}と道^{みち}りて
兄弟^{きやうだい}のうて吉^{きち}利^り支^し丹^{たん}に降^{くだ}る
望^{のぞ}くしてつる浪^{なみ}人^{ひと}兄弟^{きやうだい}して親^{おや}と孝^{かう}ひせ
了^しるうてぶき業^{わざ}うれは只^{ただ}困^く窮^{きう}なる

のそとふきとるせつる所^{ところ}兄^{あに}ふくふき
吉^{きち}利^り支^し丹^{たん}とつとつる人^{ひと}して法^{はふ}慶^{けい}を
親^{おや}と安^{やす}ふつとつるや頻^{しき}りつとつる
弟^{てい}はとては我^{われ}然^{しか}るてつとつる兄^{あに}とつる
ハ天^{てん}乃^のをれもつるてつとつる某^{たか}とつる
とつるやとつるてつとつる親^{おや}とつる
とつる今^{いま}つるてつとつる親^{おや}とつる
つとつる親^{おや}とつる吉^{きち}利^り支^し丹^{たん}とつる
筑^{つく}とつるつとつるしつとつる吉^{きち}利^り支^し丹^{たん}とつる

かの兄弟と保科肥後ちうく一とまゝのりて

擯駕門外

き良上座成る驚了系わち上座深正を金巻乃
裏門より入るなりと垣面を突くといふ者股
よりきくみき走り出驚ておどく山をよ登殿に
深正の美足了てわしゆせバく上座乃家ハ突
あゝハつれまや所振舞ハけ家乃疵了所ん
あくすやうふきりどし走了てつせふふ
眼でいゝおてしりうはりふも怪ううとて

あつてめいふひーとまゝ

三人と追慕して三巻了りて

はる銀生平燈衣は多ハ家来乃悪めによりて怪を

三巻了りて配はちりけにひつひめ深正とて

まゝ人のけうきとちりていふりて今一度

ゆいちゃんと越あつちと碎き素てめりしお

曹司い休賊方小等来産まゐの但乃水と

おて三巻のまゝのねとまらる深正一巻

羽衣せー送るものやういゆて救ふ乃き

と遂にし其のち天和三より在る多敷免と蒙
飯玉と一州は素方乃五切りの城室とありて
主人はまじくも忌つゝまゐりて也

百姓基助お母のて家富

彼中乃五海口郡一宮お村の百姓子三人
田代と云ふよりあてのりし兄二人は耕作
怠りながらしてま進せしむる弟乃基助
ハ形乃まゝく性如こゝろま進可くもなぐ
母もえんが方てはくやない嫁が孝ひ成る

又まゝいふにしつゝ時二人の兄はよく親あが
縁始ありしはくやない田代で少なりて我くハ
つゝも取やつゝしつゝ例もま進となれしは
取次と云ふとんとつゝま進はつゝのいふ性
知れしつゝのりつゝ海口郡をたれしつゝのり
いふとつゝ維いしはくやないはつゝのりつゝ
かゝりてお母しつゝお母しつゝも恨むるかの
あゝと云ふはつゝてお母進するものもなかりし兄ハ
お母のま進はつゝてお母のつゝお母のつゝ

甚ふくもきく候言一 負^{おの}めどきやにほひ
やして左^{ひだり}も不便^{ふべん}なるにあらひ兄^{あに}をさう
ちう^{ちう}所^{ところ}年^{とし}の秋^{あき}最^もあして清水^{しみず}の田^り比^ひ多^た
ふく^{ふく}切^き大^{おほ}きく^く致^{いた}く^くな^なつ^つ基^{もと}助^{すけ}が^が
ハ^ハト^トし^しも^も痛^{いた}む^むの^の種^{くさね}も^もあ^あら^らう^うも
よく^{よく}立^たて^てう^うな^な伐^ひ取^とり^り平^{へい}氣^き見^みふ^ふつ^つて^てさ^さ
き^きう^うの^のに^にあ^あら^らう^うも^もあ^あら^らう^うへ^へ訪^{しん}つ^つあ^あり^りて^て
目^めの^の味^{あじ}の^のう^うろ^ろう^うに^にい^いじ^じき^きも^も也^{なり}急^{いそ}が
甚^{いそ}ふ^ふと^とい^いふ^ふや^やあ^あら^らう^うし^しみ^みの^のあ^あ基^{もと}助^{すけ}が^がい^いぬ^ぬに

おま^{おま}は^はあ^あら^らう^うと^とい^いふ^ふや^やあ^あら^らう^うに^に候^{なり}
い^いふ^ふ人^{ひと}の^のあ^あら^らう^うと^とい^いふ^ふや^やあ^あら^らう^うに^に候^{なり}
あ^あら^らう^うも^もき^きふ^ふの^のう^うろ^ろう^うと^とい^いふ^ふや^やあ^あら^らう^うに^に候^{なり}
い^いふ^ふあ^あら^らう^うの^のあ^あら^らう^うと^とい^いふ^ふや^やあ^あら^らう^うに^に候^{なり}
う^うな^な頃^{ころ}と^とい^いふ^ふし^しみ^みも^もい^いふ^ふや^やあ^あら^らう^うに^に候^{なり}
兄^{あに}と^とい^いふ^ふし^しみ^みも^もい^いふ^ふや^やあ^あら^らう^うに^に候^{なり}
て^て國^{くに}の^のあ^あら^らう^うと^とい^いふ^ふや^やあ^あら^らう^うに^に候^{なり}
の^のあ^あら^らう^うと^とい^いふ^ふや^やあ^あら^らう^うに^に候^{なり}
家^{いえ}の^のあ^あら^らう^うと^とい^いふ^ふや^やあ^あら^らう^うに^に候^{なり}

あゝぐまの泣くて一合せしにアと云聲
たふし胸あくる突れちれを今一合せし
と一合しわしきしに氣色あつてはし
しきあつてみ合ししき身あつてあつた
てあつたあつた口わきみいあつた
意図しきと際しきわしきしき
成のわしきしきわしきしき
まゐしきわしきしきわしきしき
ハ小教乃しきわしきしきわしきしき

てハ鏡しきしきしきしきしきしき
本屋しきしきしきしきしきしき
しきしきしきしきしきしきしき
ちれぐ三えしきしきしきしきしき
まゐしきしきしきしきしきしき
決別しきしきしきしきしきしき
あつたしきしきしきしきしきしき
腰しきしきしきしきしきしきしき
まゐしきしきしきしきしきしきしき

しらば水たわいしくあまば今海すの外づつに
ゆくあらの数かずやうでゆくよ白濁はくじやくくしくそそ
登のぼりてあめらまうして素もとのりうやひ海うみりと
あまのあううば某たれ按摩あんまうう療治りょうぢはつてん
りやで戯たわぶま候まうやうに水たわのいしくあまの
まを家けま乃吉助ハ何なんも念ねん点てんのゆめ眼めに
あうてあの外そとあが討うてすえんとあまがはあ
いしく下したこハ誰たれしも白しろくあう只大目おほめう
るあうとあう吉助ハうあうと飛と出でて石いしを

うをあが候まうはあう親おや系けいに兄あにの顔かほまへうやと
あまうう頭かぶう繁はげのうはまう入ま切きてあう
回まわく弟あにはあうう肩かたあうう大おほ家けはあう
あううす某たれ兄あにあう三さん三さん家けと三さん家けとけにあう
てあまの素もとまをてきやうこれ候まううあまのあま
あハ父ちちあ兄あにのあまのあまううてあまを合あせに
あてい一ひと封ふうて水たわが積たかのじま
あいつあ兄あにあまううううううううううう
あうううううううううううううううううう
あうううううううううううううううううう

ハワれづーいあつても財のせゝも可あづ
るやーえ丁ルバたのーき出はるゝい
づくときひる礼あやのぐ面少くわ
がう細き山園情のよけお息下野の
明は松の城う今もやういれを
しと類すくなき者もといふる
兄はあつた親のやうに二百五
二百名とあつても屋敷にびく
けりしれゝとあつた由に
あつた

くあぜざるハツカし世元注
ヤーもいといき説

法野遺臣本取辰討

元禄平に三月大内うき
武城へあつたりけり
城は内区長維多一
久多ハ公家あつて
中よりあつたりし
同月十日松の

あつきの意出さくしかく只一語了ちりお
長く血小刀乃所りれく肩りきつりうに切
けりやとこハ願中りともて速んとしに
ありて又後う速んともいふありて
付握川と三葉を抱きあひひきりて
しりりすす上りて速にに
鳴るといひ甚うきあひと速に
ふりて聖日甲行を系あふりて
丁より切候やとありて一月十日に

候海よりうきあひりて
ありて金中入るは平あ
出たりて上りて
座座いしと頻て平獲りし内
件乃座座りてりとも教ふもの
あき海より速りて上りて
て十方せりし鬼くとも速りて
忘照として我をすきりて向く
こりて物了候へりて許るる

とて定むべきものなりとて思ふは長谷大石内蔵
の文よりく武に猛きものなりとて思ふは
心せりぬとて思ふは上使の儀とて思ふ
柴壩の儀とて思ふは俗に異なりとて思ふ
同様の思ふとて思ふは思ふに思ふに思ふ
も人より思ふは思ふに思ふに思ふ
氣を思ふに思ふに思ふに思ふに思ふ
かゆに思ふに思ふに思ふに思ふに思ふ
中に思ふに思ふに思ふに思ふに思ふ

き父母妻も思ふに思ふに思ふに思ふ
一戦に思ふに思ふに思ふに思ふに思ふ
志を思ふに思ふに思ふに思ふに思ふ
お京作の思ふに思ふに思ふに思ふに思ふ
扇を思ふに思ふに思ふに思ふに思ふ
るを思ふに思ふに思ふに思ふに思ふ
了に思ふに思ふに思ふに思ふに思ふ
金根を思ふに思ふに思ふに思ふに思ふ
とて思ふに思ふに思ふに思ふに思ふ

本屋在と云ふ買人のあつたし至一生で
不忠不孝なりと云ふ優越せんといふしが
人のため天の罰するものびやうて言
恥辱で買てりやそれ比る所しおぬと
天の覆はず此の載るものなりやあつた
少くも知事のもつてもい難い時やそれ
あつたつて又買をたつて赤穂を
源八渡り云々といふので判つた
大はやくこのいふ件のもつたの封をきく
今

三百あつたつて買人の口をぬき
いふとせよ隣家の買人えそれ
かくして流石と云ふ人
まづいふと云ふ人
大蛇父あつたつて
うなやうなつて
えづみつたつて
いふと云ふ人
化の又云ふ人

山霞河竹三五七九とひさあふいひハ是を
 おふのこどもうん良ううううううううう
 物々戯うううう上野女をハ人ううう
 門あ人出ううう長ヤハハハハハハハハハ
 能うううううう長ヤの戸口をううう
 うううう門外の大壁もいんう一の誰うう
 づううううううう天井櫓のト
 ううううううううううううううう
 出来ぬうううううううううううううう

の拜殿の下へ向ふしく人影もあはれといふ
 せしむるといふうみく拜殿の縁の板二三枚踊り
 やう放ちてあはれも今も束めあはるる上座の
 してはるるなりそのやうに白くのはちきり
 かの三人は拭帯をうして丸腰をして居る
 ありとなくあはれも上座のあはれの人なり故
 ゐのけりけりる疵もあはれめあはれもあはれ
 裸であはれしてあはれが難いものなりけりけり
 人なりとあはれとあはれけりけりけりけりけり

武具波 奥田孫太 守重

馬内 富貴物有 西国

武具波 本垣源 守重

日 大石流 守重

近和 勘七 守重

これ 畧 守重 亦同

知中 大石 守重 良金

馬内 中村 勘助 守重

武具波 武具波 守重 政利

武具波 奥田孫太 守重

馬内 同 守重 先延

上日 矢田 守重 守重

日 武具波 守重 守重

武具波 及い 守重

武具波 守重 守重

馬内 堀 勘助 守重 武具波

日 石 勘助 守重 守重

日 守重 守重 守重

日 武具波 守重 包

武具波 貝 守重 友信

甲 守重 守重

武具波 守重 守重

武具波 守重 守重

武具波 守重 守重

武具波 守重 守重

武具波 守重 守重

監物 守重 守重

日 武具波 守重 守重

武具波 守重 守重

武具波 守重 守重

武具波 守重 守重

武具波 守重 守重

日 武具波 守重 守重

武具波 守重 守重

武具波 守重 守重

武具波 守重 守重

換目付 沙流と云市 別体

江後 間 十八年 光長

とく 奥田貞太り

口 多良太郎七 教範

口 村松三太夫

口 多良孫九郎 安房

口 新野 和久左衛門

口 横川 勘平 宗利

口 三村 修三郎 包左

口 寺坂 玄太 伝三

やうく じうく 父多良左衛門の 教うらうら 教ハサル

長良の 名うく かくるのハ お代 太夫 守りて 御あり

乃 此代 走ハ 事の外 ありきと ときく 一 叔 上 守 あり

討 一 ハ 大石 父 まで 和として 七 一 上 守 あり 事 あり

か とい 人 守 あり 内 十六 人 ハ 守 せに 死 下 家 あり

文 多 内 守 あり 守 あり 守 あり 守 あり 守 あり 守 あり

換 使 の 守 一 ハ 守 あり 一 ハ 守 あり 一 ハ 守 あり 一 ハ 守 あり

七 日 ハ 守 あり 守 あり 守 あり 守 あり 守 あり 守 あり

か とい 守 あり 守 あり 守 あり 守 あり 守 あり 守 あり

守 あり 守 あり 守 あり 守 あり 守 あり 守 あり

守 あり 守 あり 守 あり 守 あり 守 あり 守 あり

守 あり 守 あり 守 あり 守 あり 守 あり 守 あり

守 あり 守 あり 守 あり 守 あり 守 あり 守 あり

のまゝのしゝるゝや、^{武生}武生のもゝにのみ、
りゝゝの^い浮海^き浮海^り定^じ人のめすゝくゝを
りゝゝの^い唇^{くち}唇^{くち}と^ままゝゝゝゝゝゝゝ
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
年のゝのまゝの^い出^でゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
句のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

大名ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ル景ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

少将のゝの^い頭^{かぶ} 佐平のゝの^い候^け 幸^いの^い批^ひ判^{はん} 泉^い無^む

卦の^い番^{ばん}僧^{そう}やゝ^い口^{くち}すゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

してゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

りゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

只^い像^{ざう}公^{こう}の^いひ^ひき^きゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

こゝろおけの事ありしに、あるハガの屋敷に
清和の大名えりし、ゆゑにひりて、さうさく、
そ、流罪ト云、死罪ト云、皆それハ、説き
あはれ、さうさく、かます、大名、改定、と、か、
さう、清和、さう、さう、と、い、ハ、二、日、
月、代、水、風、日、清和、さう、さく、人、に、
入れ、い、さう、さく、二、日、の、評、定、人、の、大、
名、と、さう、さく、ゆゑ、さう、さく、丹、ね、さ、い、ち、さ、長、田、
さう、さく、さう、さく、人、に、い、さく、の、口、上、

清和内匠家来へ、伝、渡、され、上、意、内、匠、改、定、
清和、走、乃、清和、改、定、さう、さく、ゆゑ、
不、備、力、は、さう、さく、清和、改、定、さう、さく、
さう、さく、さう、さく、人、の、雙、と、
改、定、家、来、に、中、人、徒、黨、
具、り、と、改、定、一、改、定、始、末、
さう、さく、改、定、改、定、の、い、さく、さう、さく、
さう、さく、改、定、改、定、の、い、さく、さう、さく、
さう、さく、改、定、改、定、の、い、さく、さう、さく、
さう、さく、改、定、改、定、の、い、さく、さう、さく、
さう、さく、改、定、改、定、の、い、さく、さう、さく、

由くに天林地祇もあられうわやうなるふやうを
物うさへくくくハやうき大石内蔵少法名忠誠院
又空解劍君土と号し其の外の字一人一様に上
了又のま下了劔のませけきし間新と
或影ハ秋元但馬守殿家中に取張の者取て
そくひちんとする内通以法名冷光院殿前
少府朝散吹毛左利大居士と号する大居士の
石塔と中にうきとる一平立像とまじりて
それよりまじりておとく多清の袂とけりて

日長門内門外了市とせり細川殿より吊料
中へ白銀三十枚許りゆめあうちの地走屋をぬす
ねうりまうりより内くより銀五十枚寄せれ
しころ餘の三取の大名えうりハ白銀二十枚諸
名えうりより内くより三千枚より板屋六人の
者金よりあつ裸着よりは多たより是吊新の
ゆうてりりれをぬすずきりたよりあり右の金銀
より金七束代の物よりあひ冥鬼のうぐりぬす
山門をぬすれり追名の詩哥とて

しつしつ 儒林 林家の某氏

去歲季冬 故少府監 奉 穗城 津守 長雄の寓

大石内 乃 人等 四十六人 異體 同志 報 讐

趨 義 今 茲 仲 春 初 四 日 官 裁 不 令 各 處 久

刑 其 志 雖 逐 其 性 不 令 天 平 命 午 將 時 運 平

唯 堪 哀 情 披 淚 而 作

關門 突入 茂 荆 鄉 易水 風寒 壯士 情

炭 啞 形 表 追 豫 讓 蕙 歌 淚 滴 挽 田 橫

精 誠 貫 日 以 何 悔 義 氣 披 山 寸 太 輕

四十六人 肩 伏 又 上 天 意 佐 忠 貞

又 司 頭 了 大 石 良 雄 忠 節 名 士 八 字 冠

安 一 四 十 六 人 の 義 臣 等 と 追 悼 了

叢 林 沙 門 亡 名

大 吏 一 謀 如 響 應 石 堅 盟 會 烈 丈 心

良 籌 運 帳 勝 千 里 雄 力 披 山 擲 萬 尋

忠 仰 君 恩 曾 撫 劍 節 臨 自 殺 也 彈 琴

名 碑 朋 六 何 當 朽 士 女 口 傳 遺 恨 深

号 々 句 臥 了 冠 冢 一 一 七 海 邊 遺 臣 等 と 挽 了

る顔とけり

例門名

大勲燿々新臣道

石針堂刺鉄石に

良謀在懷おる最

雄雌鳴匣勇追尋

忠宣伏劔不願己

節應辨明預破琴

名翼四飛無處億

士材盡奥又窮深

の義臣等先君ノれをくゝするものぞ

ふくふくし武府よりまゝ故郷へさんど

うけつハあてゝ紋のやうにそのびやうの染

てうやひ又世上の評判とすはぐめ天せいの佛

神とよめやうにとつしめてくゝし百子の謀ひ

もはきく人ロもはきく飛たぐゝふびす

今くに記うゝうのその大切とひききし始末

うゝやうをう痛ん人おとひきく界

うの陽切のうやうしうとくゝの陰謀の

強きうゝと推してうゝ

大坂のかきうゝい自滅す

大坂あ士町の承きうゝをうゝをうゝの

少者うゝをうゝをうゝをうゝをうゝ

う一面の書ときりし不浄なり石を質人の
扱見——ふふう文作も切なりくま人の意に
乃供せふうの文うりれを殿も候うや
きぬひくう不便マ今内ハ或生にもやふあハ
おろろろろ町人のりくといひ若うて
けうとん希代の者うふ端う吊てうせや
修うま——即ち石垣千日まううはの石
堀一取うまううはの延宝五年の四月
うてりし

母といふ女来う入る

けうとん町のりうにりる者の後室の年七八
うりし朝うたへう粉やう紅やうへ衣裳
うりまむ今やの風儀でけうしりうハ意
るやういハ神祕清でまぬううう毎日
の身がうりれむ世のやう主人の嘲うけくも
うりまむりし二葉をうりる男もりし
けうとん厭いうりしうりうに親あけ
いひうて人をまのうりうりうりたう

承引もせざるにむせん方々マ思ひらん書^く玉
新^{しん}了^り了^り調^{てう}へ^へ西^{せい}木^ぼ橋^きの上^うう^う方^かせ^せ千^{せん}飯^{はん}の水
庭^{てい}了^り投^{てう}一^{いつ}不^ふ何^なう^うし^しほ^ほん^ん沈^{しん}も^も妙^{めう}で^で川^{せん}に
流^{りゅう}ま^まり^り約^{やく}形^{けい}堂^{だう}の^のま^まに^にそ^そく^く引^ひり^りあ^あ一^{いつ}ふ
以^いに^にも^もや^やで^で親^{しん}如^にく^くれ^れう^うれ^れを^を母^{はは}に^にあ^あま^まら
ゆ^ゆい^いづ^づく^くを^をあ^あれ^れく^くあ^あり^りふ^ふ世^せで^でな^なま^まの^のは^はして^{して}あ^あま
と^とま^まう^う様^{やう}と^とく^く後^ご世^せ三^{さん}昧^{まい}の^の人^{ひと}と^とう^うづ^づき
極^{ごく}悟^ごの^の時^{とき}と^とま^ま財^{さい}と^と献^{けん}す
松^{しょう}平^{へい}相^{さう}摸^もち^ちの^の内^{ない}津^{しん}不^ふ如^に意^いよ^よつ^つき^き思^し取^と中^{ちゆう}ナ

合^あせ^せ知^ちり^りも^もう^う一^{いつ}通^{とう}く^く今^{いま}ま^まに^にに^に持^もよ^よ一^{いつ}に
竹^{たけ}村^{むら}甚^しな^なあ^あと^とく^く二^に百^{ひゃく}石^{しやく}と^とま^まう^う極^{ごく}め^めて^て悟^ごし^しき
人^{ひと}と^とく^く越^こえ^える^るあ^あめ^め一^{いつ}に^に焼^や垣^{がき}の^の外^{がわ}粕^{かす}味^{あじ}の^の味^{あじ}
世^よと^とあ^あう^うづ^づし^し程^{ほど}と^とて^て人^{ひと}何^{なん}う^うも^も一^{いつ}向^{むか}に^にあ^あう^う
し^しは^はは^は度^ど訪^{ほう}へ^へ一^{いつ}ハ^ハ某^{たがひ}が^が禄^{ろく}十^{じゅう}の^の張^{ちやう}虎^こい^いう^うす^す
と^とあ^ある^る軍^{ぐん}級^{きゆう}入^いハ^ハ張^{ちやう}武^ぶ等^{とう}と^とく^くく^くお^おつ^つあ^あ子^こと^と
白^{はく}銀^{ぎん}三^{さん}十^{じゅう}貫^{くわん}目^め所^{しよ}一^{いつ}と^とり^り度^どと^とひ^ひく^くと^とあ^あり^り一^{いつ}度^ど
殿^{でん}と^とし^しく^くめ^め羣^{ぐん}臣^{しん}と^とな^なあ^あん^ん一^{いつ}と^とあ^あへ^へう^うと^とあ^あれ^れと^とも
件^{けん}の^の新^{しん}く^くい^いハ^ハ法^{はふ}士^しの^の例^{れい}と^とも^もあ^あり^りと^とて^てう^うあ^あ

きふいざうしとる

親^{おや}の^う父母^{ふぼ}を^み見ん^みる^るて^てお^お承^{うけ}す

ほ^ほに^に答^{こた}へ^へ推^{おし}田^{でん}庄^{しやう}を^をと^とて^て津^つ條^{じやう}の^のゆ^ゆを^を人^{ひと}を

幼^この^の時^{とき}父^ふ母^ぼを^をた^たく^くれ^れ顔^{かお}を^をそ^そと^とへ^へあ^あら^らう^うと

あ^あら^らう^う嘆^{なげ}き^きに^に元^{げん}禄^{ろく}十^{じゅう}三^{さん}の^の夏^{なつ}海^{かい}西^{せい}漢^{わん}滅^{めつ}

の^の親^{おや}を^を護^ごあ^あま^まし^して^て八^{はち}十^{じゅう}日^{にち}の^の岡^{おか}帳^{ちやう}を^をし^しに

毎^{まい}日^{にち}素^そ願^{がん}の^の願^{がん}を^を發^{はつ}し^して^て父^ふ母^ぼを^を一^{いっ}つ^つび^びと^とせ

顔^{かお}を^をそ^そと^とへ^へあ^あら^らう^うと^とて^て一^{いっ}つ^つび^びと^とせ

念^{ねん}求^{きう}せ^せう^うは^は必^{ひつ}日^{にち}に^にあ^あの^のゆ^ゆめ^めを^を親^{おや}の^の

清^{せい}お^おう^うき^き勢^{せい}の^のま^まし^しけ^けし^し十^{じゅう}徳^{とく}き^きの^の禪^{ぜん}門^{もん}を

う^うし^しる^るて^てえ^えは^はり^りに^に我^{われ}の^のゆ^ゆめ^めが^が父^ふ母^ぼを^を毎^{まい}日^{にち}

と^と素^そ願^{がん}を^を一^{いっ}つ^つび^びと^とせ^せう^うは^は必^{ひつ}日^{にち}に^にあ^あの^のゆ^ゆめ^めを

い^いふ^ふて^て祈^{いの}り^りを^をお^おと^とし^して^て三^{さん}十^{じゅう}日^{にち}に^にあ^あの^のゆ^ゆめ^めを

海^{かい}の^のゆ^ゆめ^めを^を母^ぼを^を海^{かい}の^のゆ^ゆめ^めを^を母^ぼを^を海^{かい}の^のゆ^ゆめ^めを

一^{いっ}里^りの^のゆ^ゆめ^めを^を母^ぼを^を海^{かい}の^のゆ^ゆめ^めを^を母^ぼを^を海^{かい}の^のゆ^ゆめ^めを

し^しる^るて^てえ^えは^はり^りに^に我^{われ}の^のゆ^ゆめ^めが^が父^ふ母^ぼを^を毎^{まい}日^{にち}

新著聞集

慈愛篇第二

鶏雄と烹をなげく

母燕雛と愛して雄を追

母猿子とくしめて水に没す

窮民と賑へ救ひ賞し値

無縁病と三十三取小病

猿子親と療へて人心を感服す

宥免讒者先非と後悔す

尾州幼君臣と顧す
慈君戰伐自他と回向す
身とすて人々救ふ

鶏雄と烹とまげく

越前の福井松本の藤屋といふ簀簾屋にてある
夜飼ひの鶏の雄と殺し料理しある雌
いふやうに電のまゝ小飛来して捕へて罫小で飼ふや
しおはるゝ又さびおであまほしく鳴あまこれ
そのふわに雄とあるひあうゝやと人に思はれ
喰ひてしとちうと

母燕雛と愛しと雄と追

大坂道頓堀鍋屋道味といふ者の宅小燕乃巢と作

三年ふちびり朝雄をく巢へ出
し戸をあらざりしハつらうとして描
きし四の雛りし母鳥漸く養育
ある或日一の雄燕くくうまう人日
小巢よりんとせし母鳥いじりき
よせしし日つらうと斬く一取小成
たひと雛と養育く母鳥乃居る乃小成ハ
針とくま子二羽小喫せし教く母鳥
このふとあらうとやせしうと險く翼と搏

て件の雄と追やし残る雛と育ひし也貞享
三年のふちびり

母猿子とくしりて水に没す

信州下伊那郡敷島の百姓猿と親子飼り或時
夫を野に出て妻ハ洗濯せんとして灰汁と焼灰
と桶小湛へけしふの子猿桶のうちと窺ひ
見ると桶乃ちちうと熱湯乃中ふちうて
ぬりたり親猿これとて甚泣きしころふ
ま婦とて汝の子と慕ハ不便な人乃所為なり

孫は是非なきものと知りて教訓しられど
親猿そのまゝ鍋乃蓋をもち来る桶と蓋とを
わすれしをぬきぬきをせし教ゆりや亭主
のまうに哀れ覺へ今より後にもうするも山
飯もとて云ふ恨しげふ死より子猿を抱きて
出行しと不審く思ひ思ひ見たりれば山
れへハハゆき殿島河原ふゆき橋乃半ふき
子と抱き身と投て死より畜類としてかく
子と慕ふと迷ひありとて猿乃をばいじめ

聞人ふく袖とぬきさけりハハハハ

窮民と賑し救ひ賞し値

備中國矢田村洪水しと田畠悉く損はせし
百姓既り飢死ふしぬ庄屋見ると堪がと思ひ
て米穀の有限とより出し各に借與へ又藁餘
多しとて草履とじりや作して賑せし
人の悦びなりと限するし
湯浅民部と奉行として取の困窮をたの給ひ
し小村より飢死助乃扶持としり
數

あゝ彼等のやゝ水ふはくしてゐる 矢田村
よりハ何乃願もせざるを庄屋乃計として小
百姓ハ成次第と知りあつてゐる 不屈乃のちりて
いゝく穿議―にぬいられむ只今けるやへ
きハ本意いゝつゝ又隠すべきやも侍るをれを
とて有乃頃ふ云―うバ奉行手と拍驚まかむ
やう奇特なるものもなまてすゝゝ大守ハ訴へ
ぬひ―み感心斜るゝ彼にり―もハ木で賜り
―もろ深

無縁病を三十三取ふ

大坂長堀中橋乃草履賣仁無衛の店より行脚乃
僧腰も茶を乞ひ―うむ見ろ―ハ―も
うへいゝせうやして茶碗の―先すゝめろ仁
無衛の兄ちりし市無衛といふ者居合や今日ハ
志乃はふゝけり食―き某の天鹿相なるハ時
海―も―マ―も奇特なるものなり行てたべん
とて伴いち―僧のいゝく亭主を眼乃り―ま
やきれゝこの眼病の―いゝ身体やあゝろゝ又も

院乃隱居して作り汝一人乃にうてもさるゝ難儀
もゆいじごうやして翌日同道して登山
しむひ元禄三年乃るなり見ばまゝびの人と
やうらまひなりあつゝははふ貴きひと
あそわりし時と人々感涙せし

猿子親を療して人心で感涙す

信州下伊奈郡入野谷村乃者冬乃日獵ふ出不仕
合ふく飯る乃大木ふ大猿乃居りしとそれ
究竟のりなりとて討り夜ふ入宿ふつきぬ日

皮と剥ちん凍てゝ剥ぎしとて圍爐裏に
釣ひぬ深更ふ目とけぬしとれむいあてけ
し火影ふに隠れしとて不審しとれむい
能くしとれむ子猿親乃服下ふりつき
居るふ一匹つとれむとて火くしとれむ
のり親猿乃鉄炮疵をうつとれむとれむ
哀さふとれむとて新しとれむとれむ
くは積りしとれむとれむ先非と悔て翌日
頃て女房ふとれむとれむとれむとれむ

れ一公不亂の念佛者となり諸國行脚ふ出
やちん

有免讒者先非也後悔す

戸川肥後守殿家来秋山茂右衛門よりその
主人の悪吏十三ヶ条公儀へ訴へしうきふと
なきふく不届やしうきと別茂右衛門で
主人ふ下るなり家老乃面々相儀して首を
刎んとし主人すくぬいしやれふ及む
しそて許しぬりしうき家中れ者も奥業や

かそ念やめくしうきとち池田宮内殿へ身味
すそて國使ふ茂右衛門来し小憎き倭人そ
来れと皆人にししよ肥後守殿それものうき
そそふびふし汝ふくく達に血体よりある
うき宮内殿ふ達なむより人を云べきとくし
るむ茂右衛門頻ふ感涙おしせびわうがき心
おれ我わやう至極侍ぬ生に世よりをれが
許辱思ふそて悦しと也ふきふあしころふ
みふそがくくうき我わやうとハりふべきや

尾州幼君臣と顧す

と清浄して心をふりよ油断するやみく
 信じて座を切り後益油断をとりて座をのね
 白兔のりでも角のりでもなりて下人墮て
 ちやゆのりて後難秋のりて汝が所為ゆへ
 世上のふ座うへに今よりのち堅く停むべし
 信らるゝなり

慈ト君ニ戰ハ伐ハ自レ他ニ也ト回ニ向フす

東照權現宮關ヶ原津敷向乃及之旅僧と見
ふていふ人をもとめんとす上浄土宗

此所化なりと有りしハ則ち神を近く召して
 合戦の吉凶を告ぐと云ふに負さるる事あり
 それをハ敵を偏し捕くはなれりしをばぬ
 ちありてハ勝利ありとて答ふ重て問せしハ
 いんハ勝利と云ふも僧乃とて神といふ
 天下を治平にハ萬民を安泰にし天神社
 佛閣乃廢頽と興隆せんとかく大悲の鑑と召
 して敵一人を討てハ佛敵神敵とて降伏せ
 しと云ふハしと云ふハ示しヤ

三つにわかれむ大いに御感有て候ふは我々臣民
 万々まういふにせしめて關ヶ原に誘引し多し
 自他の戦死の者も過去帳に載るせんとく吊
 りあり後三州大樹寺に浄土相承五重血
 脈等たつず受得しぬひ称名六萬遍日課
 戦場ふても尚やうなるハズしとやか
 僧ハ後々觀智國師をナセ

身とて人々を救ふ

永井信濃守殿江戸れ屋——もして家来傍おと討

むうい乃客去たるぬふやる入りしと客のぬハ日ある
信はもあといやとすしなりし海やる者人々討
ぬりしる出しぬりぬと使てつハまぬふんぬ
より先就ふぬりやと答て契半目ハ麻上下で
ちやし例ぬかりぬ開るへ家老中ぬあひ
信乃何ぐしぬ己方へ来りし他家よりまう
たふんぬハ幡も照覽しぬぬ出すべしハ思ハ
されきたりてハゆ来乃意をけとるに似る
去るし武士乃一道立ぶるぬハちやがじし所詮

此者なりし出しぬ自ハ馬を切て立退くんとぬ
きつぬぬぬぬて眼をぬぬぬ疾人ぬ
はるぬぬ捕ぬぬぬぬぬ頓て信はもあ
昔しぬばりぬぬぬぬぬ定ぬぬぬぬ是非
ふ及びぬぬぬぬぬぬぬぬぬ也他所
ぬし見付たぬぬぬぬ討捨へぬぬぬぬぬ
ぬハぬぬぬぬぬぬ宜ひぬぬぬぬぬぬぬ
悦浅かぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ